

高校出向授業における職業教育の一考察

伊藤 圭一

I はじめに

高大連携事業などで高校へ出前講義をすることが多くなった。その時、依頼を受ける際に多い内容は、職業理解である。職業理解と言っても、単に職業の話をするわけではない。分野別に職業について話をする、そして、進学先（大学や短期大学）でいかにその知識を身につけるかを話して学びにも興味を持たせる。どちらかと言うと後者に重きを置くことを求められる。進学する意欲を高め受験へのモチベーションを維持するためにも、職業に興味を持ち、進学の必要性を感じ、高校での学修に励むことにつながる話を求められるのである。

私の大学での担当は基礎教養であり、公務員受験講座を担当していることもあり公務員についての職業理解について依頼が来る。より深く、公務員を理解してもらうためには、生徒さんたちの話を積極的に聞く姿勢が必要である。積極的に聞く姿勢から聞く側に主体性を持たせる手段としてクリッカーを使用することにした。

学校の代表として職業紹介の出前講義に参加をすると直接的な学校PRに陥りがちであった。生徒さんもそういう講義に腐食ぎみでありもっと生徒さんの意欲を高めていくという正攻法で出前講義を満たすことはできないかと考えた。今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方を検討するに当たっては、学生・生徒の「学ぶこと」や「働くこと」への意欲や積極的な態度をどのように育てていくか、また、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な能力、すなわち社会人・職業人として自立するために必要な能力を身に付けているか否かという点が喫緊の課題である。とりわけ高等学校段階においては、キャリア教育の充実を図ることによって、すべての生徒に、「学ぶこと」や「働くこと」への意欲を高め、社会人・職業人として自立するために必要な能力をはぐくむことが必要であると（高等学校におけるキャリア教育の論点と基本的な考え方¹⁾より)「学校から社会・職業への円滑な移行」が重要なポイントと考えて講義を組み立てることにした。

II 出張講義とアクティブラーニング

II-1 大学と高校の連携の必要性

キャリア教育を効果的に進めるためには、地域・関係機関や家庭との連携・協力は欠かす

1) 中央教育審議会キャリア教育・職業教育特別部会（第10回配布資料）2008年

ことができない。このため、学校内の体制との有機的な連携を図りつつ、例えば、学校外で、

- ① 就業体験活動の受入れや職場の見学、あるいは教員への研修等について協力していただける企業等や地域社会との調整
- ② オープンキャンパスや「出前講座」などの活動に関する大学・専門学校等との連携・協力
- ③ ほかの学校における事例の把握や小学校・中学校との連携・協力
- ③ 保護者のキャリア教育に対する理解を促進するとともに、保護者の支援が必要な活動についての調整

などを行う者（調整役）などを確保して、学校外との協力体制を整備していくことが必要であるとの意見が出された。

高等学校と大学等の連携については、教育内容や方法等も含めた全体の接続が図られていくことが重要である。これまで、オープンキャンパス、高校生の大学等の授業への参加や単位認定、大学等から高等学校への「出前講座」など、高大連携の取組は様々なものが行われているものの、単なる授業紹介にとどまる場合もあるなど、必ずしもキャリア教育の視点から取り組まれているとはいえず、また、いまだ散発的な状態にとどまっているのではないかという指摘もある。

今後は、「大学等の向こうにある社会」を生徒に意識させたキャリア教育の視点から、連携・協力のための方策を工夫することが必要である。例えば、高等学校においては、在学中のキャリア教育に関する学習歴を残し、生徒が面接等の場面において活用することなどを行い、大学においては、入学段階における生徒のキャリア発達について十分理解した上で、生徒の発達課題を高等学校に伝えることによって高大連携事業に取り組むことなどが考えられる。こうした連携事業を推進することで、高等学校卒業後、さらには、「大学等の向こうにある社会」における自立を意識した主体的な進路選択を、生徒自身が実施できることにつながると考えられる。したがって大学等のキャリア教育・職業教育の在り方とも関連することから、どのような連携・協力が考えられるか、更に検討を深めることが必要である。

一方で、短期大学の場合は専門学校と修業年限が同じなので競合関係にもある。専門学校を含む専門学校に対しては、専修学校においては、高校生に対し、専門技術の実習等といった実技を体験する機会を提供しているほか、職業に就くために必要な知識・技能・資格等の事例を紹介する取組等が行われている。このような取組が、高校生の職業に対する理解を深め、将来の職業を見据えた進路について考える機会を与えることともなっている。高校生が職業意識を持って主体的な進路選択を行うことができるよう、専修学校、とりわけ専門学校と連携した職業教育の取組が、各地で一層行われることが必要である。

II-2 アクティブラーニングの必要性

新しい学びの方法として、アクティブラーニングを取り入れた授業改善の方向性が、強く示されている。すでにアクティブラーニングに取り組んでいる学校は、「なにをいまさら」という感じなのだが、「それって何?」という高校の先生にとっては不信、不安、負担、不要などの反応が見受けられることも確かである。そもそもアクティブラーニングの起こりは、

反転授業と同様に、アメリカの大学教育の改革から生まれた。日本におけるアクティブラーニングのきっかけとなったのは、2012年の中教審答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」であり、その中で「大学教育」の改善として能動的学修（アクティブラーニング）への転換が必要であるとされている。もともとなったアメリカの大学教育は、もともと研究よりも学生の教育を重んじる風潮にあった。しかし、19世紀の後半から教育よりも研究を重視する傾向が強まり、大学の教員は、まず研究者であり、その分野の専門家であるべきという考え方が主流を占めるようになった。加えて、第2次世界大戦後の大学の大衆化によって、幅広い学力の学生が大学にあふれるようになり、自由という名の下での放任では、大学教育が危機的な状況になってきました。そこで、研究よりも教育に目を向けるべきではないかという、教育的復古の動きが起き、その一つの解決方法が、「教える」から「学ぶ」へのパラダイム転換であった。一方的に教員が講義を行い、学生はただひたすらそれを聴く。そのような従来型の学びのスタイルを改善し、学生が主体的な学ぶスタイルに移行する。そのためには、講義を聴くと言う活動に加えて、書く、話す、発表するなどのよりアクティブな学びを取り入れることになった。²⁾

そもそも大学教育から日本に導入を求められたアクティブラーニングであるが現在は小学校、中学校、高校にも導入が求められている。小・中・高等学校でのアクティブラーニングにおいて、アメリカと日本ではその導入する理由が異なる。アメリカの大学教育では、放任からの転換という動きの中でアクティブラーニングが求められてきた。しかし、日本の小・中・高等学校へのアクティブラーニングの導入の動きは、全く逆の方向からのニーズだと言える。すなわち、「教える」スタイルからの脱皮を意図している。そこに相違はあるのであるが、方向性は違っても、学び手が学習の主役となり、体験の中から知識を獲得していくということは共通している。能動的に学びさえすれば本来は良いわけで、例えば、「最後にテストをします」と言って始めた授業よりも、「最後に、隣の人に説明してもらいます」と言って始めた授業の方がより能動的にテキストを読むことにつながる。つまり、教員の問いかけ、授業のデザイン、ゴール設定をちょっと工夫するだけで、能動的な学びを引き出すことができる。教員の発言が大切になるのである。

II-3 注意点

アクティブラーニングを導入することで、生徒の主体的な学びを引き出し、能動的に学ぶことを通して、より学習内容の定着をはかり、気づきや発想を獲得することができる。それは単なるグループ学習の技法を学ぶだけではなく、基礎知識やベースとなる情報を今まで以上に効率的に伝えることが必要だということを理解する必要がある。まずは、教師の役割の変化である。「教える」から「学ぶ」への転換は、授業スタイルや学習者の行動が変化するだけでなく、教師の学びへの関わり方自体が転換することを意味している。つまり、情報の伝え手、説明や解説をする人、という役割よりも、学びのデザイナー、ファシリテーターとしての役割が増えてくることを表す。今までは、教師力の向上というと、いかに深く教材を

2) 杉江修治『協同学習入門』ナカニシヤ出版2013年 p33-34

理解するか、いかに上手に説明するか、どれだけわかりやすいワークシートを作製するか、と言うことが中心になってきた。今後は、それらに加えて、意欲を引き出す問いかけができるか、個人の力を引き出すことができるか、個人をつなぎ、グループやチームの力を引き出すことができるか、集団での学びを促進することができるか、と言う能力が必要とされている。教員が求められるファシリテーションのスキルには、傾聴やコミュニケーション等がある。しかし、アクティブラーニングや協同学習を進める際に、最も重要になることは、実は、安心と信頼である。安心と信頼が構築されていない学習集団で、アクティブラーニングをやらうとしても、効果は低い。アクティブラーニングの様々な取り組みを学習目標の達成に結びつけるためには、安心して自分の考えや意見を発言できる環境が不可欠である。出前講義においても、短時間に安心できる空間を作ることが大切になってくる。

Ⅲ 生徒さんが動くことを求められる模擬講義

模擬講義は、専修学校との比較からも生徒さんが動くことを求められている。座学ではなかなか、その機会がない。一般的なアクティブラーニングの手法を導入しようとしても時間が20分から40分程度では生徒さんが「楽しい」と感じるのはなかなか難しい。「楽しく」感じられなければその先の意欲がわかず、大学の名前を出して講義をするので、万一「つまらない」という感想にでもなってしまったら、募集活動に悪影響を与えかねない。アクティブラーニングの技法ではなく、道具を使うことにした。クリッカーである。クリッカーは解答ボタンを押すという事で自然に講義に参加する。ボタンを押すことで主体的な講義への参加を促すことができるほか、「他人の意見」をその集計機能によって見ることができ、自分の答え以上に興味のある他人の解答を見ることができる点に期待をした。

人は、他者や社会とのかかわりの中で、職業人、家庭人、地域社会の一員等、様々な役割を担いながら生きている。これらの役割は、生涯という時間的な流れの中で変化しつつ積み重なり、つながっていくものである。また、このような役割の中には、所属する集団や組織から与えられたものや日常生活の中で特に意識せず習慣的に行っているものもあるが、人はこれらを含めた様々な役割の関係や価値を自ら判断、取捨選択や創造を重ねながら取り組んでいる。つまり、人は、このような自分の役割を果たして活動すること、つまり「働くこと」を通して、人や社会にかかわることになり、そのかかわり方の違いが「自分らしい生き方」となっていくものである。

このように、人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見だしていく連なりや積み重ねが、「キャリア」の意味するところである。このキャリアは、ある年齢に達すると自然に獲得されるものではなく、子ども・若者の発達の段階や発達課題の達成と深くかかわりながら段階を追って発達していくものである。また、その発達を促すには、外部からの組織的・体系的な働きかけが不可欠であり、学校教育では、社会人・職業人として自立していくために必要な基盤となる能力や態度を育成することを通じて、一人一人の発達を促していくことが必要である、といったことを心掛けながら模擬講義を組み立てていった。

〈構成〉

- ① 働く？ことを考えよう
- ② 働くためには学びが必要
- ③ どんな仕事に就きたいか？
- ④ 組織で働くってどんなこと？
- ⑤ 公務員と民間企業の違い
- ⑥ 公務員になるには？
- ⑦ 問題を解こう！

〈構成〉の①から②でフリーに意見を言ってもらい教員がその意見を受けることで信頼関係を積んでいき発言しやすい雰囲気を作る。③から⑥はグループワーク方式で考えをまとめてもらう作業をする。この時にグループ活動というのが難しければ、ペア活動を行うと良い。机を移動する手間もなく、短時間で実施できるペア活動を効果的にできるようになると、グループ活動を広げていくこともできる。⑦は1枚5分程度の時間をかけてクリッカーで回答を求めながら進めていく。まだまだ時間のある生徒さんにこれからの学びがいかに役立つかを伝えることで学ぶ意欲を高め³⁾、その職業に「就いてから必要な学び」と「就くために必要な学び」が存在すること知ってもらうことでより、学びの深さを知り、進学の際のひとつの情報として役立ててほしい。また、社会に進むときには「就くための勉強」だけでは組織で役立つ人間にはなれないことを知ってほしいというテーマで模擬講義を行っている。アクティブラーニングは教員がファシリテーターとして細心の注意を払い生徒さんとの信頼関係を築きながら講義を進めていくと成功につながる。「楽しかった」と思える出張講義をすることが出来れば、その講義に参加した生徒さんと教員の信頼関係は強く結ばれることになり、所属大学への興味もそれなりに増していくと考えられる。文字通り、能動的にホームページを見て、さらにはオープンキャンパスに足を運んでもらえるようになる。

能動的な進学先選びにもアクティブラーニングは効果的だと言える。

IV 今後の課題

クリッカーは番号でしか解答できない。選択肢を作る際にどうしても恣意的な選択肢を作ってしまうがちである。また、質問に答えていくという形式を取らねばならず敷かれたレールを進む感じが否めない。時間がたくさん取れる模擬講義であれば、そこから意見交換などをさせるのだが、短い時間の場合は「誘導尋問」に近い内容になってしまう。そう感じさせないように工夫をしているが、今のところクリッカーの珍しさでそのことを感じる生徒さんは少ないようである。

もう一つは、アクティブラーニングは、教員のファシリテーションスキルが問われると誤解されていることである。ファシリテーションのスキルには、傾聴やコミュニケーション、アサーション、エンカウンター等、いろいろある。関係書籍も、多く出されている。しかし、それは、あくまで技術である。本当に重視すべきは、安心と信頼である。残念ながらそ

3) バーバラ・グロス・デビス『授業の道具箱』東海大学出版会2008年 p.219-200

れに気が付かず安心と信頼が構築されていない学習集団で、アクティブラーニングをやるうとしている状況が多くみられる。アクティブラーニングの様々な取り組みを学習目標の達成に結びつけるためには、安心して自分の考えや意見を発言できる環境が不可欠である。たとえば、見当違いの発言をしたとしても、集団が許容してくれる環境ができあがっていなければ、グループ活動は活性化しない。

特に後者は、模擬講義を引き受けた大学の信用まで無くしかねない一大事であり、教員は、それに気が付く必要がある。目の前の生徒さんの信頼を勝ち得なければ、大学への信頼など遠い話であることに気が付くべきであり、そういう教員が増えていくことが充実した模擬講義、出張講義が良い方向に進んでいく原動力になるはずである。職業教育での出向講義は教員ができる一番の広報活動でもあるということを多くの教員に気が付いて欲しい。職業のイメージを生徒さんに理解してもらう講義は、実は大学をそして大学教育を理解してもらう一番の機会であるという事を多くの教員に知っていただきたい。